



形成外科とは

身体に生じた組織の異常や変形、欠損、あるいは整容的な不満足に対して、あらゆる手法や特殊な技法を駆使し、機能のみならず形態的にもより正常に、より美しくすることによって、みなさまの生活の質”Quality of Life”の向上に貢献する外科系の専門領域です。(日本形成外科学会ホームページより)

当院形成外科について

現在指導医 1 名、専攻医 1 名で下記に示す疾患(日本形成外科学会の規定による分類)の治療を行っています。

- 1) 新鮮熱傷
- 2) 顔面骨骨折および顔面軟部組織損傷
- 3) 口唇裂、口蓋裂
- 4) 手、足の先天異常、外傷
- 5) その他の先天異常(耳介の先天異常、先天性眼瞼下垂など、その他)
- 6) 母斑、血管腫、皮膚腫瘍
- 7) 皮膚悪性腫瘍およびその他悪性腫瘍切除後の変形の再建
- 8) 瘢痕、瘢痕拘縮、ケロイド
- 9) 褥瘡、難治性潰瘍
- 10) その他(眼瞼下垂、レーザー、陥入爪など)

なお、美容、保険外診療については取り扱っておりません。保険適応外のものに関しましては他院をご紹介させていただきます。



左より 仁熊 七海 医師 末延 耕作 医長

当科の特色

形成外科全般について診療を行っておりますが、当院が母子総合医療センターということもあり現状では約 8 割が小児の症例となっております。なかでも乳児血管腫、太田母斑、異所性蒙古斑などの血管腫、あざに対するレーザー治療が診療の中心となっております。

小児の形成外科といえば、まずは小児の先天異常が筆頭にあげられます。口唇顎口蓋裂をはじめ、小耳症、埋没耳、先天性眼瞼下垂、手足の先天異常などの症例を取り扱っています。

そのほか顔面骨骨折や傷跡の相談などにも対応しております。

乳児血管腫

乳児血管腫に対しては赤色斑の隆起傾向を確認でき次第、速やかに色素レーザー照射を行なっております。このことにより腫瘤を形成する前に治療が終了し整容的に優れた結果が得られております。皮下型や色素レーザー抵抗性の腫瘤に対しては内服療法にて治療を行っております。

色素性母斑

色素性母斑の中でも小さな物は切除を行っておりますが、巨大なものに対してのレーザー治療も積極的に行っております。

口唇顎口蓋裂

口唇顎口蓋裂については月1回専門外来を開設しております。形成外科、耳鼻いんこう科、矯正歯科、言語聴覚士が一同に会し、一度でこれらの科を受診できるような環境を整えております。胎児が口唇顎口蓋裂と診断されたときには産科と協力し、出生前の相談にも応じております。

小耳症

軽症から重度のものまであります。軽度の場合は拘縮耳、といって正常に近い組織量があるため小児期の矯正等で形態が改善するものもあります。重度の場合は組織欠損量が多いため肋軟骨等を移植する手術が必要になります。また全く耳が欠損している無耳症というものもあります。肋軟骨を移植する場合には十分な軟骨の成長を待たないといけないため、10歳前後で手術を行うことが多くなります。当院では耳鼻咽喉科と協力して治療を行っております。



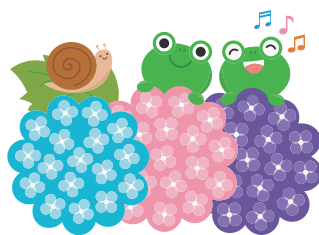
埋没耳

側頭部の皮膚に耳の軟骨が埋まっている状態を埋没耳といいます。昨今の感染症対策のためにマスクを装着するとき、耳が側頭部に埋没していると装着困難になるため、治療に対する需要が上がっています。生後早期に矯正治療を行うと改善する見込みがあるため、当院では早期より装具による矯正を行っております。装具装着には家族の協力が重要となります。矯正治療で改善が乏しければ手術になります。幼少期の手術は軟骨の成長を妨げる恐れがあるため、就学前に手術を行うことが多くなっております。

先天性眼瞼下垂

眼瞼下垂は上まぶたが十分に開けられず、まっすぐ前を見たときに上まぶたが黒目を被っている状態をいいます。生まれつき認められる場合を先天性眼瞼下垂といいます。

上を見るときに顎を突き出して見る等の症状があります。原因は多種あるのですが、上眼瞼を挙上させる筋肉が欠損していることが多いです。当院では眼科と綿密に打ち合わせの上で必要な時期に手術をするよう心がけています。



最後に

近年地域の先生方に先天異常や各種あざに対する治療を認知していただき、診療がスムーズに行えるようになりました。また早期に紹介していただくことにより手術が回避できる症例が増えているように思われます。これもご紹介いた

いた先生方のおかげと痛感し、感謝しております。

引き続きみなさまのお役に立てるよう精進してまいりますので、ご助力のほどよろしくお願い申し上げます。

